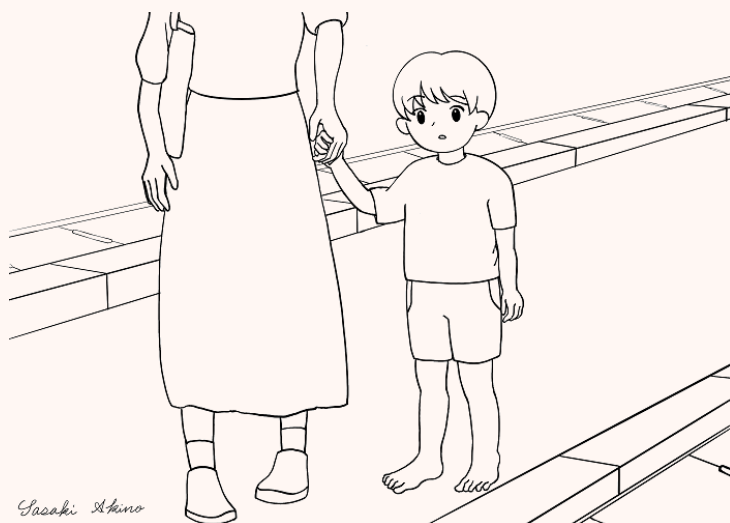


普通

ぼくは、どこにでもいる普通の男の子だ。普通のお父さんと、普通のお母さんと、普通のお姉ちゃんと暮らしている。普通に遊んで、普通にごはんを食べて、普通に寝ている。頭は、良くもないし、悪くもない。テニスをやっているけど、強くもないし、弱くもない。背だって、高くもないし、低くもない。とにかく、何から何まで、ぼくは普通だ。

ある日、お母さんが近所のコンビニへ行くと言ったので、ぼくもいっしょについて行った。ぽかぽかとあたたかい秋の日だった。お母さんといっしょにコンビニに入るとき、すれ違ったお客さんがぼくの足元をじろじろ見た。レジでお金を払うときは、店員さんがぼくの足元をじろじろ見た。ぼくは裸足だった。晴れた日に近所に出かけるときはいつも裸足だ。だって、アスファルトはあたたかくて気持ちがいいし、コンビニのひんやりした床も大好きだから。



コンビニから家に帰るとき、近所のおばあさんが心配そうに言った。

「あらー、裸足。お靴はどうしたの？」

ぼくはどうして心配されているのかわからなかったし、何て答えればいいのか困ってしまって黙っていた。お母さんはにっこり笑って、「うちの息子は裸足が好きで、いつも裸足なんですよ」と言った。

お母さんは家に帰ってから、ぼくにこう言った。

「普通、みんな靴をはいているから、裸足の人を見て、びっくりしちゃったんだね」

そのとき、ぼくには「普通」という言葉が、はじめて聞いた言葉みたいに、なんだか変な言葉に聞こえた。

ぼくたち家族は、ちょっと前まで、東南アジアのある街に住んでいた。子どもはみんな裸足だった。きれいなレストランに行くときや、バイクの後ろに乗るときは靴をはいた。でも「普通」は裸足で遊んでいた。ぼくのいところは、欧米のある街に住んでいるけど、その街のコンビニやスーパーでは、子どもだけでなく大人も裸足だった。だからぼくも、いところの住む街に行ったときは、毎日ビーチで遊んだあと、裸足で買い物に行った。それが「普通」だった。

ぼくはお母さんに聞いた。

「ねえねえ、どうして、ここではみんな靴をはいているの？」

お母さんはうーん、と考えてから答えた。

「道に落ちているものを踏んだら痛いから、かなあ？」

「え？ でも、前に住んでいたところの方が、道にいろいろ落ちてたよ。こんなにきれいな道だったら、歩いても安全だよ。」

「確かに。うーん、どうしてみんな靴をはいているのかなあ。」

お母さんもわからないみたいだった。

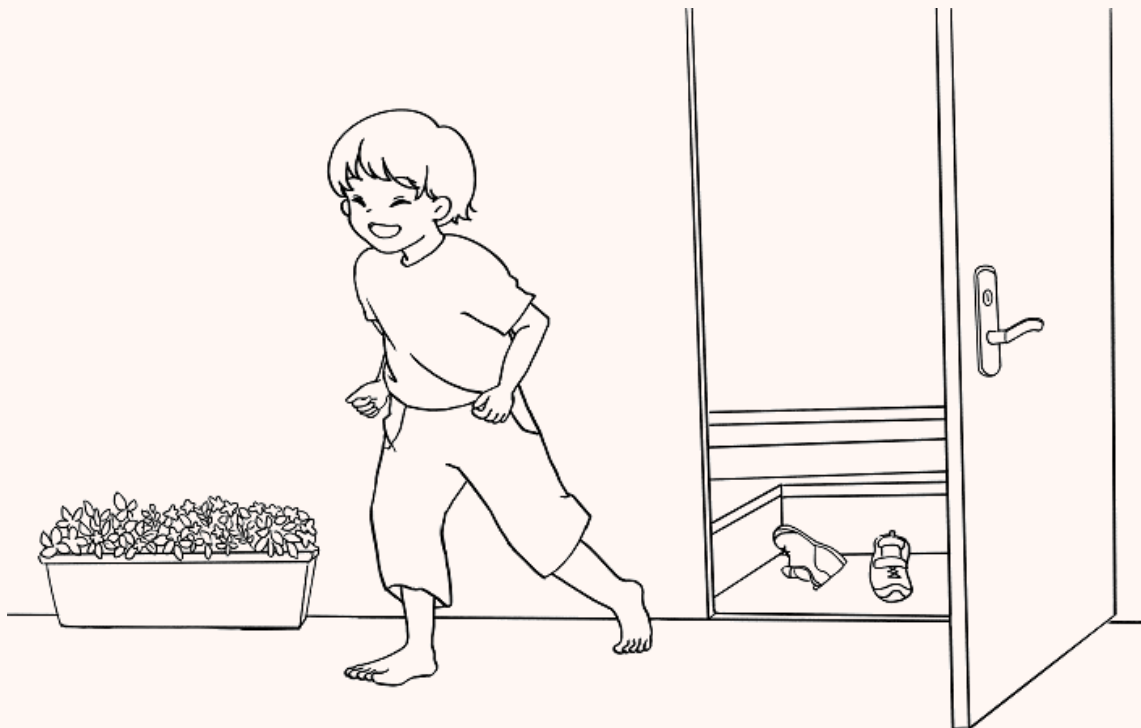
そこに、お姉ちゃんが来て言った。

「みんながはいてるから、はいてるんじゃない？」

そう言うお姉ちゃんは、毎日靴をはいて学校や買い物に行っている。東南アジアのあの街や、欧米のあの街では、ぼくと同じようにいつも裸足だったのに。

秋が過ぎて冬が来ると、ぼくの住んでいる街には雪が降った。冬は、靴をはく理由がわかった。裸足で雪の上を歩くと、足が冷たすぎるからだ。だからぼくも靴をはくようになった。何回か、靴をはくのを忘れて「いってきまーす！」と雪の上に裸足でとび出してしまったけど、春が来る頃には、靴をはき忘れることはなくなった。

あるあたたかい春の日、お母さんが近所のコンビニへ行くと言ったので、ぼくもいっしょについて行くことにした。外はやわらかい風が吹いていて、春のおおいがした。ぼくはいったん靴をはいて外に出たけど、やっぱり一度玄関に戻って、靴を脱いだ。お母さんはにっこり笑って「じゃ、行こう」と言った。靴をはく理由とか、普通って何かとか、難しいことはよくわからないけど、はっきりとわかることもある。それは、晴れた日に裸足で歩くのは最高だってことだ。



Sasaki Akino

(1476 字)

(2021.8 Written by Junko SATO)

(All pictures are drawn by Akino SASAKI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典:「たどくのひろば」(<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.